
楽園を求めて

鈴風忍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

楽園を求めて

【Nコード】

N9634G

【作者名】

鈴風忍

【あらすじ】

軍属魔術師だったバレントは突然首を言い渡された。そこから始まる彼の受難の日々を描いた物語。

(前書き)

短編という公開に関して形をとっておりますが、実際のところ習作です。

一応きりのいいところで話は終わっておりますので、続きが気になるなどということはないかと思えます。

魔術を学び、それを行使することで彼は軍人となった。

十年前の戦争では、剣林弾雨の前線を駆け巡りそれなりの活躍だつてした。それを認められそれなりの出世だつてした。しかし――。

「バレント、君は首だ」

「は？」

上官から部屋に呼び出され行ってみればいきなり首の宣告をされたバレントは、あまりにも唐突な出来事に思わず固まってしまった。

「ちょ、ちょっと待って、俺がいったい何をしたって言うんだ!？」

上官といつても顔を覚えていた程度の認識しかない男にもバレントは普段と変わらない口調で問いただす。いつもマイペース、良くも悪くもそれが彼、バレントの特徴の一つだった。

「いや、首というのは半分冗談だが、軍の再編の話は知ってるだろう、誰にも扱うことの出来る【科学】と、それを使った兵器を扱える人間が十分に揃った今、時代遅れの【魔術師】はいらないのだよ」

「そんな……」

「とはいえ、魔術師の多くは科学者に転向することで、その立場を守った。だが君はそれが出来ない人間だろう、そこでだ、先ほどの首の話に戻るわけだが、君には三つの選択肢が与えられる」

「三つの選択肢？」

「そうだ。軍を辞めるか、それとも見習い兵士たちとともに一から鍛えなおすか、はたまた私の恋人となって永久就職するか。の三択だ」
「OK、軍を辞める」

即決し部屋を出て行こうとするバレントを上官は慌てて呼び止める。

「冗談、冗談だから、軍に残るつもりなら訓練をしておいて来い、そうでないなら辞めるんだな」

「訓練に行くから、軍に残らせてくれ……」

「そうか、では、明日から行ってくるという」

「は？」

訓練開始にはいくらかの猶予期間でもあるだろうと思っていたバレントは、再び間抜けな声を出してしまう。

「明日から？」

「そうだ。いつまでも無駄飯喰らいを置いてけるほど、我が軍に余裕は無い」

「ああ……さいですか、了解」

明日から訓練に参加するための準備をするために部屋に戻ろうとするバレントを再び上官が呼び止める。

「何だ？」

「軍に残った上で、私の恋人になるつもりは――」

「無いから、あんまりしつこいようなら、パワハラとセクハラで訴えるぞ？」

「それでも構わん！！　じゃなくて、冗談だ、冗談だからそんなに怖い顔をするな」

バレントは上官の冗談だという言葉信じられないまま背後を警戒しながらその場を後にした。

□

こうしてバレントは見習い兵士たちに混じって訓練を受けることとなった。無駄に広く感じる訓練場の真ん中できちんと整列している訓練兵たち。そこにやってくる体格のいい教官といまいち頼りない細さのバレントの二人。

「というわけで、今日から皆と一緒に訓練に参加することになったバレント・エイフルだ。皆、よろしく頼むぞ」

教官はバレントとともに見習い兵士たちの前に立ち、バレントのことを紹介する。それが終わるとバレント自身が軽く挨拶をする。

「あー、バレントだ。短い間だとは思うがよろしく」

挨拶をしながら周りの連中の顔を見ていく、すると毅然と立ち並ぶ訓練兵のその中に、場違いな小さな少女の姿を見つける。

少女は立ち並ぶ訓練兵の半分くらいの背しかない、だが、国から支給された軍服に身を包んでいるところを見ると、そんななりでも一応訓練兵の一人なのだと分かる。が、しかし、だからといって、こんなむさ苦しい場所に、小さな少女が居るということに納得できるわけではない。

そんな疑問を解決しようと色々と推測しているところに教官の言葉が響いた。

「ちなみにお前らより歳はいつてるが、まだ【少年】だ」

「なっ、エイクス、お前何を言ってやがる!？」

教官の言葉に一瞬ぽかんとする一同だったが少し遅れてその言葉の意味を理解し、【下ネタ】にどういう反応したら良いのかと皆が皆、微妙な表情をしていた。

そんな中、一人だけ教官の言葉の意味がまったく分からず。何故バレントが慌てているのか、また。何故周りの者たちが微妙な顔をしているのかと首をかしげている少女が居た。

（少年？ 老け顔ってことかしら？ いや、でも歳はいつてるって言ってたわね……いったいどういうことなのかしら？）

教官の言葉が下ネタだなどとは思ってもよらないほどにそういった知識の無い少女は、いつそ教官に言葉の意味を聞くべきかどうかと考える。しかし、周囲の人間の微妙な顔から、それはやめておいたほうがいいと、何となく察する。

だが、少女は好奇心に勝てなかった。

「あの教官殿、質問よろしいでしょうか」

「うむ、許可する」

「その者が少年とはどういう意味でしょうか？」

「うん？ ああ、分からなかったのか、つまりこいつはどうて——」

教官が言葉の意味を言おうとした次の瞬間、突然大きな爆発音がした。

「な、敵襲!?!」

「畜生、一人やられたぞ」

「耳が……耳がああああ!?!」

その音に驚き耳を押さえて怯む者もいれば、敵襲かと伏せて周囲を警戒する者もいた。だが、そんな中で怯みも警戒もせずに【音の原因】を見据えていたのは教官と少女の二人だけだった。

「はっはっは、からかい過ぎたか、耳の鼓膜が破れたらどうしてくれるんだ」

「うるせえ、少年だの何だのと、からかい過ぎだ」

「どうでもいいけど、事態の收拾つけない? 何がおきたのか理解できていない連中がパニックを起こしてるわよ」

「しっかりしろ、俺が敵をとってやるぞ」

（生きてて欲しいのか死んで欲しいのか悩むセリフだな）

「ずっと前から好きでした!」

「あっそう」

「ひげぶ!?!」

平然としている少女にパニックのどさくさに紛れて愛の告白をする男、次の瞬間、少女は無表情のまま自分の倍くらいはありそうな男よりも高く飛び上がり、そのまま空中で身体をきれいにひねって男の顔面を蹴り飛ばした。蹴られた男は良く分からない悲鳴とともにそのまま後ろに倒れこむ。それはあまりにも見事な空中回し蹴りだった。

（あの小さい身体であの威力だと!?!）

バレントはいったい何の冗談だと少女に突っ込みを入れたくなるが、人一人蹴り殺しても顔色を変えない辺りに恐怖を感じ何もいえ

なかった。

「失礼ねえ、殺してなんていないわよ」

「な、考えが読まれただど!？」

バレントは人の心さえも読む少女の得体の知れなさに更なる恐怖を感じる。だが、少女はそんなバレントに呆れながら。

「いや、口に出てたし」

「え？」

どうやらバレントはあまりの信じられない出来事に思わず考えを口にもらしてしまっていたようだった。

「教官、いい加減収拾つけませんか？」

「おっと、それもそうだな。皆、注目!!」

教官の一際大きな声が当たりに響いた瞬間、浮き足立っていた者たちの動きがぴたりと止まり、声の主である教官のほうを向いた。

「まったく……まだまだひよっこだな」

教官はこの程度のことです浮き足立ってしまう訓練兵たちの情けなさに頭を痛めつつも、音の原因がバレントの魔術で、彼は自分が得意な爆撃の魔術を応用して大きな爆発音を出したのだということを教えた後。

「とりあえずこの程度のことですうろたえるとは、未熟すぎる! 罰としてフロイル以外の者は訓練場を十周! バレントは二十周だ! 無論、魔術の使用は禁止だぞ」

「な！？ ちょっとまってくれ、魔術も使わずにいきなりそんなに走れるわけ無いだろう！！」

訓練場はかなり広く、バレントの体力では一周できるかすら怪しかった。

「言い訳無用、良いから走れ！」

教官に一括されて泣く泣く走り出すバレント、しかし案の定、彼は一周する前にばてて倒れこんでしまった。

「……体力がないとは聞いていたがこれほどとは……よくあの戦場で生き延びたな」

「はあ……はあ……。あの時は若かったって言うか、魔力で無理やり動いてたからな……」

「いやー、それにしたって体力無さ過ぎでしょ」

「うるせえ……」

「とりあえず二十周走り終えるまでは帰れないからな」

「マジか」

「マジだ」

結局バレントは教官に頼み込んで二十周を5周に大いにまけてもらい、なんとか完走したのだが、結果としてバレントの身体を、まったく動けなくなるほどの筋肉痛が襲った。

「いやはや……もう三十近いから筋肉痛ももっと先かと思ってたが、意外と若かったんだな。いや、まさに【少年】か、はっはっは」

「少年って言うな……てか、うるせえ！」

ベッドの上で錆付いた機械のような動きしか出来ないバレントと、その様子を見に来た教官は、ただ単にからかいに来ただけの様だった。

「しかし……動けないんだよな」

「ああ、動けない、お前が来なかったらどうなったか」

「そうだな……」

ぞくり、とバレントの背筋を冷たいものが走った。

「さて、エイクス、何だその目は？」

「いや……別に」

「別にじゃないだろ、何ていうか、捕食者とかそういうやつが目だぞそれは!？」

「はっはっは、なあに、キニスルナ」

そう言いながらゆっくりとバレントに近づいていく教官。

「止めろ、止めろ!! ——アッ——!! ——」

連続して鳴り響く爆音と悲鳴、それも数分後には静かになった。

「……はあはあ……エイクス、後で絶対殺す」

「はっはっは、中々良かったぞバレント」

「いや、あんたら何やってんのよ？」

しばらく鳴り響いた爆音と、いつまでも戻ってこない教官の様子を見に来た少女、そこにはペンで全身に落書きされたバレントと、ペンを片手にとりどころ焦げていたものの一仕事終えたかのように良い顔の教官の姿があった。

「いやはや、ついな」

「畜生……。最初からペンを狙えばよかった……」

「そうね。それで下半身の筆でも狙っておけば良かったと思うわよ」

少女の言葉に固まるバレントと教官。

「……童貞は知らない癖に、妙なことは知ってるんだな」

「ああ、だって急所の隠語じゃない」

「……エイクス、こいつ昨日の蹴りといい、結構やばいやつか？」

「やばいやつというか……」

「そういえば、自己紹介がまだだったわね。私はフロイル・ガーカ、以後こいつなどと呼んだら殺すわよ？」

「エイクス、俺は断言する。こいつは絶対やばいやつだ」

教官が説明するよりも先に少女は自分の名を告げた。その名を聞いたバレントは、どこかで聞いたことがあるようなと思いつつも、それよりも強く思ったことを口に出してしまっていた。その次の瞬間バレントの身体が強い衝撃とともに宙に浮かび、気が付いたときには壁に打ち付けられていた。

「言っただけよ、『こいつ』なんて呼んだら殺すって」

「……ああ、そうだったな……ぐうううう……」

どさりと床に落ちるバレント、蹴られたところに穴でも開いたのではないかと思うほど痛かったが、筋肉痛なのも相まってまったく動けず。ただ呻き声を出すことしか出来ずにいた。

そんなバレントを横目に、教官の方を向きなおすフロイル。

「質問いいかしら？」

「許可しよう」

「教官とこの男は知り合い何か？」

「ああ、俺とバレントは以前同じ前線に居たことがあってな、その時知り合った」

「……前線？　こんな貧弱な男が？」

「そうだ。こいつは今でこそこんだが、十年前の戦争のときは魔術師としてそこそこ活躍してな。だから今日まで放って置かれたんだろうが、最近の軍の再編成でそういうわけにもいかなかったんだろう」

「ああ、おかげで今死にそうだ」

「前線で死ぬよりは良い死に方が出来そうぞ」

「筋肉痛と餓鬼に蹴られて死ぬとか、前線で死ぬのと代わらないだろ」

「誰が餓鬼かしら？」

「フロイル・ガーカ、お前さんが強いのは認めるが、餓鬼には違いないだろ」

「言うわね」

バレントは床に伏せたまま動けもしないというのに、圧倒的な強さを見せているフロイルをまったく恐れていなかった。

フロイルはその無謀さがどこから来るのか気になりあえて蹴るのをこらえて、バレントの次の言葉を待った。

「俺は確かに弱いが、言うことは言う、言いたいことも言えないで死ぬくらいなら、言いたいこと言ってから死んだほうがいくらかましだからな」

「ふうん……。とりあえず今日一日は安静なんでしょうから、そのまま寝てなさい、あと教官、いつまでも自習にしてないで授業してくれない」

バレントの言葉に納得したのか、フロイルは蹴るのをやめ、もとの目的だった教官へ言うべきことを告げる。

「おっと、それもそうだな、じゃあ、バレント後でまた様子見には来るから、安静にしてるんだぞ」

「いや、ちょっと待て——」

バレントが呼び止めるよりも先に、フロイルと教官の二人は、床に伏せたままのバレントを放ったままそそくさと部屋を出て行ってしまった。

「……あれか、餓鬼って言ったさりげない復讐か、畜生……。それを面白そうだとあの馬鹿も乗ったな」

結局バレントは、教官が再び様子を見に来た夕方までの間ずっと、床に突っ伏したままだった。

「はっはっは、すまんすまん」

教官は口でこそ謝っているものの、悪びれる様子もなく豪快に笑う。

「お前、絶対わざとだろ、いつか必ず仕返ししてやる」

「好きにしろ、そう簡単にはやられんけどな」

そういつて教官はまた豪快に笑うのだった。

(後書き)

まずは最後まで読んでくださった方々ありがとうございます。

今後に生かすため、様々なご意見、ご感想をお待ちしております。
もしよろしければ一筆お願いいたします。

(辛口コメントでもぜんぜんOKです)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9634g/>

楽園を求めて

2010年10月18日03時44分発行